講師　平中忠信氏

略歴

■１９２６年・大正１５年生まれ

■１９４５年　旧制（私立）札幌昭和中学校卒業

■１９４５年　道総務課開発計画地方事務官

■１９７２年　道共同募金会事務局長

■１９８１年　国際障害者年推進連絡協議会委員長

■１９８９年　道社会福祉史研究会長

■２００２～４年　浅井学園大学講師

■　現在　道社会福祉史研究会顧問

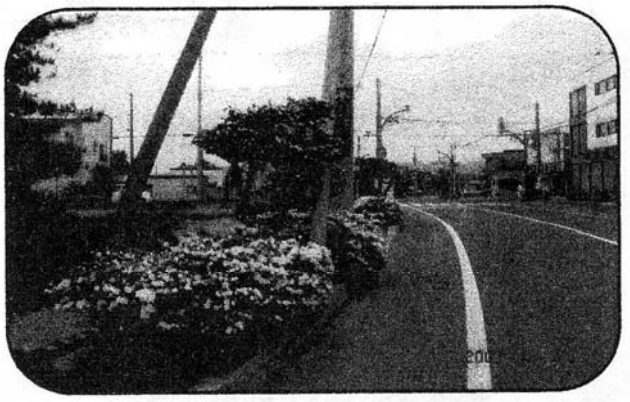
著　書

「札幌市社会福祉事業史」（共同）

「山谷源次郎」

「日本児童文学代表作集」“石狩の開拓の子ら”を執筆

「木村文助の生活綴り方の足跡」など



木村文助先生の綴り方指導

木村文助先生との出会い

平中忠信でございます。

木村先生との出会いは昭和中学校に先生が来まして私どもが教え子というわけです。私、今満八一歳で四年ほど前に右の目がすっかり悪くなり、左の目も悪いのですが、左だけで見ている状態です。本を読んだり、物を書いたりするのが好きで、色々仕事をしています。

木村文助を語る平中氏

昭和一四年に五年間の道庁幹部職員養成を目標とした私立昭和中学校（夜間）が正式に発足していますが、其の前に北海道庁に勤務する青少年のために道庁は北海道青年学校というのを昭和一一年ごろつくりまして、その発展としてできたものです。今の南高校、当時の庁立一中の校長先生が昭和中の校長先生でもありました。

「資料」の写真の中に先生方の中に木村文助先生（昭和一六年～一九年、国語・作文）も載っています。昭和一九年に学校の統廃合がありまして、一一五名ぐらいの二クラスで入学生徒が減ってしまい二中に統合されました。先年亡くなりましたが芥川賞作家の高橋揆一郎がいて二期後輩で昭和中最後の生徒でした。

木村先生―札幌昭和中で最後の教鞭

私は土木部にいまして一年生は道庁の給仕、二年は職制の写字生、三年、四年は雇になりました。道庁の幹部の養成する学校で各地から集まり、昼間の中学校へ行けない青少年が市町村の推薦を受けて来たと思います。卒業後は、専門学校・大学、軍隊、道庁へ勤める、それぞれ三分の一ずつでした。軍隊へ行ったのはほとんど戦死しました。私達は道庁の部屋で勉強しました。地方からの生徒は下宿や一中の近くに学生寮があって泊まって勉強していました。私は第五期生でした。

木村先生は温厚な鳩の目のようで秋田弁のなまりがあって親しみがあり、お話がよどみなく話されました。大野小学校の「村の子供」を持っていて、作文を読みました。謄写版で刷ったものを戴きまして作文教育に当たられました。松尾芭蕉の句をよく読んで印象深いのは「よく見ればナズナ花咲く垣根かな」で「一面にナズナの花が咲いている、想像して見れ」とイメージを作らせました。同期会があれば必ず木村先生の話が出されたり、物まねしたりで、人気のある先生でした。

『村の綴り方』（文助著）に詳しく記載されていますが、私は五、六年前「木村文助の綴り方指導の足跡」を日本児童文学協会の機関紙に書いたものを種本としてお話させていただきます。

木村先生は難しい話ではなくて秋田、大野、道南の農漁村の

様子、自然の様子をよく語っていました。大沼公園、砂原、森の海岸のこととか駒ケ岳の美しさなど、私も行ってみたいとしばしば思いました。

木村先生の三段階指導法

文助先生の指導法はまず三段階指導法なんです。児童の成績を調べて、その学習力の状態から教科書の文章を書き取らせる・・聴写団。昇格させると一定の場所から目に見えるまま、聞こえるまま丹念に写させる・・写生団。それを読んで写す順序とか色とか形とか誤りを指摘してもう一度書き直しさせる、個別的な指導を何人か集めてしたんですね。次の段階は自由団といいまして、応用としてそれに類したところ、自由に選ばせる、個性に適した題を出して書かせる。自由団という昇格する子が増えると三段階指導を続けるうち、自分の家庭、親、兄弟、正直に、殴られたとか、叱られたとか、近所に「乞食」がいたとか・・、自由に書けるようになればまず大丈夫だと。

作文の中で不良じみた子が書いた「夜遊び」が滑稽に面白く、先生がほめたんですね。びっくりしてほめられたことから勢いがついて別なことを書く、書くことによって生き生きと変わっていく、いい意味のがき大将になっていく。三段階の中でまとめて書かれています。

次に考えたことは、大野小学校時代、東京と広島の高等師範学校で綴り方の課題選択か自由選択がいいか論争があり、全国で渡島でも全道でも問題になりました。文助先生は、課題選択はテーマを決めて書かせるのは簡単なようだけど、子供の自由、思想を捉えるには自由選択のほうがいいと考えました。子供たちは何を書いたら良いか分からない、テーマを決めた方が書きやすい。確かにそうなんですね。しかし文助先生はいつまでもそれをやっていると、自分で発想して何を書きたいか、本当に自分の書きたいものがあるはずだ、選ばせて書いた方が大事だと着眼していました。

講演が催された公民館

作文「涙」を読む：クラスに嗚咽：

次に作文を読ませることを考えついたんですね。

「なみだ」という長い作文で、女の子供さんの家庭で三歳のとき生みのお母さんと別れた父親とある女性と再婚したが、家庭が変わると父と継母は娘に冷たく、暴力をふるって毎日叱られるので布団の中で泣いて耐える暮らしが続いたという。

真ん中のあたりを読むと

「・・水を汲んで来た時、父は烏賊の刺身でご飯を食べていた。『とみ、飯盛れ』と私に茶碗を出した。私はご飯を盛って父の手をだしているに気が付かず、お膳の上に置いた。父は怒って『なぜ手を出しているのにここへ置いた』という。私は何も

気付かず置いたのだから、何とも答えようがなくて黙っていた。父は『耳ないのかッ』と炉の火箸を掴んだ。私は胸がいっぱいで何もいわれない、やっと『気が付かなかたから許して下さい』とこれだけいった。気が付かずにした事を、こんなにいわれるとは情けない。何時もこうして少しの事で叱られる。雪降りに家の前の雪の中へ裸で投げ込まれた事、妹の事で学校の方まで追われてたたかれた事、色々の事が思い出されてひとりでに涙が出る。台所の隅に行って涙をそっとぬぐいました。・・」、後は略します。

この綴り方を作者にクラスで朗読させたんですね。それは強制的でなくて、もしも嫌だったら絶対させない、読んでももいいという場合は読みなさい、といってこの子は勇気を持って震えながら朗読したんですね。「作者の目にはなみだが輝いた。誰一人頭を上げる子供は無くクラスに嗚咽が流れた。クラスの子供は、綴り方というものは生活と文章は二つではなく一つであることを信じ、深く考えるに至った。」ここに文助先生の綴り方指導の着眼点があったんですね。

今だったら児童虐待の問題で民生児童委員だとか児童相談所、保護司の問題だとかで出てきますが、大正から昭和初期ですからね、大野村だけでなく、私も父にデレキで叩かれたこともありましたよ。当時は父親がおっかなかったですね。生意気だったですね。母親は黙って耐えていたと思います。

現在の大野小学校

文助の教えー第一席に「橇」

文助先生は、他人を思いやる心がなくなると恐ろしくなると教えているんですね。本当の子供なのに、裸で雪の中へ投げるなんて、せっかんするていうんでしょうか。二度目の再婚で奥さんと仲がよくないのか、不和のことは書いてはいませんが、問題のある家庭の事を子供は正直に素直に書いたんですね。鈴木三重吉が採用するのは当たり前ですね。大人の小説では書けますが、作文では大変ですよね。

ここで教えている事は、「純真な子供の心を踏みにじって平気な大人たちへ反省を求めたのである。子供同士や教師の間には遠慮や駆け引きや疑いは無用である。心と心の許し合い、信じ合って行かねばならない。」ということを先生は、綴り方の中から自分は子供に教えられた、ということを本のなかでまとめています。

「写真展」を先ほど見ましたが、『赤い鳥』に綴り方が二千点も全国から集まって一〇点くらい採用する中で、大正一一年八月号の第一席に「そり」で、読んでみましたが優れていますね、なかなか作家でも書けないような筆の走りがありますね。「兄の病気」は次号の第一席、「右の手」は次々号の第三席、次々入選しました。『赤い鳥』の終刊まで五九点入選したのは全国で大野小学校だけで、優秀な作文が出たんです。我々が普段、なんだ

子供だと思っているが「石も磨けば光る」と同じように子供たちの心も光るんですね。

鈴木三重吉さんが亡くなったとき、『赤い鳥』は終ってしまうんですね。文助さんと同じ年なんです。文助先生は書いています。「自分は同年輩なんだけど彼は先生で尊敬し指導を仰いだと。」

トルストイに開眼―人道主義に導かれ

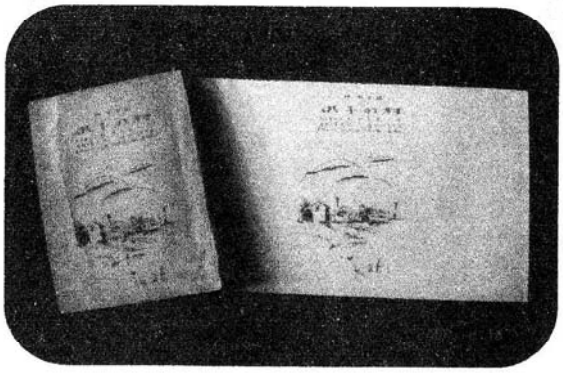
前段でお話しませんでしたけど、文助先生は北海道へ渡る前秋田真中小学校校長でロシア文学のトルストイの作品に傾倒し、作品を読むとか、松井須磨子の「カチューシャ」の芝居を見に行くとか、トルストイに合ったという作家の徳富蘆花に東京へ訪ね、インタビュー記事を「秋田魁新聞」に書くという、当時で有名人になっていて二九歳で彼の花が開いてくるんです。自然主義に開眼しますけれども、段々と自然を愛するというだけでなくて、トルストイの影響から人道主義、今でいうとヒューマニズム、人を助ける、人を愛する、他人を思いやる、自分を省みなくても人の為に助けとなる、そういう思想に段々と導かれていくのです。

村の青年たちを考えた場合、このままでいいのか、小学校で冬の間夜学を開くんです。これは昭和中学に来る動機の一つになっていると思うんです。先生に聞いてはいませんが。村の青少年を招いてトルストイの作品を読んだり、作文を書いたりしながら、導くんです。秋田県では夜学を開くのは初めてでして県の視学の視察があったりで表彰を受けるんです。

函館師範学校長に招かれ北海道へ

最初の奥さんは二、三年で亡くなり、一四歳違うその妹さんのヤエさんと再婚し馬が合って人生の充実感があったといってます。九人のお子さんがいて長男が教員で作家の不二男、次男の楠男、九番目の好さんと明日森町でお会いします。

秋田師範の先輩で函館師範学校の初代校長の和田喜八郎さんが招いて「北海道へ来て君のいい仕事に磨きをかけてやってみないか。」と誘われて大正六年の春、三五歳のときに渡って来ます。師範学校の事務長を一年やり同七年の七月から大野小学校訓導兼校長となり三六歳です。この年に鈴木三重吉が『赤い鳥』を創刊しているわけです。鈴木と文助の出会いというのは「赤い鳥」を見て非常にびっくりして、これこそ自分が望む作文教育の方向だと、手を叩いて喜んだと、書いていますが、まだ大正デモクラシーの花が咲いている頃で、軍国主義が厳しくない時代で、よき時代に彼は作文教育に燃える訳ですね。



寄贈された「村の子供」とコピー本

感心するグループ方式

私が感心したのは方言の指導も大事だが、教育方法として取

り入れていくのはグループ方式を採用する。どういうことかというと、書いた作文を三、四人のグループに分かれて批評するんです。書いた人や他の人でどこがいいか、何処が問題か、ということを話し合いさせて字の間違いを訂正したり、グループで直したりしてもう一回書かせる。どうしてこういうことを思いついたのか、私は社会福祉で戦後勉強した西洋でいうとグループワーク方式・小集団指導を色々集団活動に応用できる・・作文に取り入れたこと感心するんです。

私は社会福祉活動の中で、戦後の学校子供会がありましたが、地域子供会、地域小集団グループの活動を提唱しまして、北海道社会福祉協議会で全道に広めていくんです。今は社会教育に移っていますが、昭和三〇年代に実験的にやってすすめてきました。

グループ方式をやった中で「一銭ばばあ」、一銭で売って歩くおばあちゃんの話だとか優れた作品があって、私は当時これにヒントを得て「尊い一銭」という題で作文を書いたんです。木村先生からクラスの中でこれはとってもいい作文だからと、皆の前で読まされました。これまたグループ方式で討議した覚えがあります。

木村先生は大正一三年ガリ版刷りの文集『村の子供』、三年後の昭和二年に『村の子供』（東京から出版）を作るんです。

左遷？砂原小学校へ転校

段々と煙たがられて道庁の視学から、あの木村文助は少しいい気になり過ぎている、目を付けられて砂原小学校へ転校させられ、当時は「左遷された」と有名な事件になります。左翼でもなんでもないのに危険な考え方を持っているんでないかと、睨まれたのか四六歳です。しかしそんなことでへこたれるような先生ではなかったんです。

さらに砂原小で考え付いた教育方法は最も素晴らしい事で、自分たち（児童）の生活・地域の環境を改善していく、どこに問題があるのか、自分の家庭がなぜ貧しいのか、具体的に事実の一つ一つを捉えて話し合っていく、改造していくという言葉を使っているんです。当時革命は勿論、改造でも睨まれる時代でした。環境を改造していくため調べる、自分の足元を調べるという、生活綴り方を転進して深まっていくんです。こういうやり方は素晴らしい事で、受けた子供たちは幸いだったと思います。

『村の教育』の中で「郷土の歴史なども死んだ記事の羅列では駄目である。父、祖父、先代が如何に海と戦い、苦しみ生活してきたか、又現に戦いつつあるか、を夕食後の団欒の間の談話によって知り、産業と実生活との関係を考察して行くようにさせたいのである。勿論それだけでは不正確もあろうし不十分でもあろうから、教師は正しき史料、統計記録等により絶えず補正していかねばならない。そして彼等児童は如何なる形式に於いて郷土の振興に参加してよいかを深く考察させなければならないと思う。」こう書いて

います。

高等科生が分担―「漁業職業の全貌」発行

砂原小学校で高等科の児童に分担させて作った文集を発行したんです。それは児童共同作『漁業職業の全貌』で内容はⅠ漁撈業、Ⅱ製造業、Ⅲ付帯業の柱をもとに漁業の操業、販路、経済の一切が分かるように調べて編集されています。これは凄いことで、戦後北大社会学部の木戸幡太郎教授の元へ中央大学の先生方が連ねて来るわけです。これを見てびっくりして、「こういう先生がいたのか、北海道はたいしたものだ。」と言ってました。

「教育の目的は単に『出来る子供』を作るとか、『人を立派に仕上げる』とか、『人格の高い人物を作る』とかいう抽象的な、空漠なものであってはならない。現実の社会に処して本当に正しく、強く、生きて行くだけの力を与えるものでなければならない。」と『村の教育』の中で結んでおります。

これが文助先生の生活綴り方の基本で熟達した方法ではないか、これを私たち昭和中学校三年間ではありましたけれども私達も指導を受けました。

先生は確か昭和一三年に最後の学校戸井で退職されましたか五六歳だったと思います。読書生活に入るんです。息子（好）さんは、お手紙で「私は九番目の末っ子で生きているのは私一人です。今七二歳です。父が亡くなったのは高校三年生で部屋の中に籠ってばかりであまり話した事はありませんでした。難しい『中央公論』とか『改造』とか読んでいました。冬でもステテコ、足袋も履かないで朝裸になって冷水摩擦をしていました。」と書いております。

私の仕事―文助先生の教えの延長

私は戦後不二男さんと楠男さんとも親交がありました。闘病生活しまして実際は昭和三一年から道社会福祉協議会に勤め共同募金会にも籍を置いていました。後半は共同募金会の事務局長でした。戦前前後の養老院や民間の福祉の歴史が市町村史に載っていないことが分かり、調べに札幌から函館図書館に来ると沢山史料があり勉強しました。こういう調べる事も文助先生の教えの延長線上にあります。

スケッチというのをやりまして足寄の開拓地に行って文章と絵・スケッチを入れてルポルタージュを書きました。勤めながら日本児童文学協会支部に所属し、書いたものを出すと「なんだ作文じゃねえか」と先輩の作家たちからからかわれました。評価され選ばれたものもありますが、暫く落ち込んで「社会福祉史」編さんに没頭する時期もありました。しかし書くことは昭和三〇、四〇年代続けました。

木村先生を慕っている一人として関わりを話させて貰いました。こういう機会を与えていただき感謝しております。ありがとうございました。

（拍手）